

ないものがあれば買って送りますからいつでも言ってください」と言ってくれていて、わたしは、山下澄人さんという人の『ほしのこ』という本がすばらしいからどこかで見かけたところ買っておいでほしい、はるかちゃんも一度読んでから島に送ってほしいと頼んだら何日も経たないうちに「『ほしのこ』見つけましたー」とメールがきて、ほびなくしてそれはこの島へやってきた。

この本と出会う3年ほど前の二〇二五年の暮れから二〇二六年になろうかという時期、わたしは「てんてんてん」という曲を書いた。まだ首都で生活していた頃だ。二〇二六年の夏にはるかちゃん、ピアノとせいさんのギター、わたしの歌と動きで即興で録音したものが残されている。立川にあったギヤラリーセプチマという場所を借りて3人だけで演奏したのだけど、セプチマはそのすぐあとに周辺エリアの再開発にもなると場を閉じることになっていたし、わたしとせいさんもそのすぐあとに島へ移ることになっていたから、その場でその3人で演奏するのは最初で最後の試みで、そこで演奏する曲としてはるかちゃんがリクエストしてくれたのが、まだほとんど誰にも聴かれたことのない「てんてんてん」だった。

この曲は「てんてんてん」という音と「ルルルルル」という音のやり取りでできている。二〇二八年に『ほしのこ』を読んだとき、「てん(天)」と「ルル」という名前の子供たちが出てきて(子供じゃないかもしれない)やり取りしはじめたもんだからわたしはびっくりしてしまった。本の最後の方に二〇二六年から二〇二七年にかけて雑誌で連載されていたものだと書いてあって、「てんてんてん」と「ほしのこ」がとても近い時期にここで生まれていたことがわかって、わたしは本当にびっくりしたのだけどもびっくりしたことをつい最近まですっかり忘れていて、そのことにもびっくりした。『ほしのこ』には読むたびにびっくりさせられている。とにかくわたしはすでに昆布はばあとお会ったほうの《生きていく》をやっていて、そのことがものすごくうれしい。昆布はばあが何のことかわからない人は『ほしのこ』を読んでください。

『話の特集』の連載は一九六七年度の九月から一九六九年の十一月までと書いてあるから、一九二四年生まれの深沢七郎はそのとき五十三歳から五十五歳で、それから50年近く経った二〇二六年の文庫化にあたって、連載開始時にはまだ歩きはじめたばかりのちびっこだっ